実践校が語る
探究学習の推進のあり方
事例 2

神奈川県立山北（やまきた）高校

地域と連携した探究学習を推進、校内体制の構築によって早期に軌道に乗せる

神奈川県立山北高校は、学校の新たな魅力づくりを進めようと、2019年度、「総合的な探究の時間」で「未来探究」を始めた。地域の課題であり、自校が蓄積した知見を生かせる「未病」と「防災」をテーマに据え、約半年の準備期間で指導計画の骨子を立案し、推進体制を整備。企画・運営などを担う分掌と、実際に指導する学年団とが対話を重ね、柔軟に計画を修正しながら推進している。

探究学習のねらい

探究学習と地域課題を融合させ、学校の新しい特色に

緑豊かな県西部に位置する神奈川県立山北高校は2019年度、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（地域魅力化型）と、神奈川県教育委員会（以下、県教委）の「SDGs（＊）をテーマとした総合的な探究の時間にかかる研究」の研究指定を受け、「総合的な探究の時間」（以下、総合探究）を先行実施した。

2つの研究指定を受けた背景には、学校の特色化を図りたいという藤田正樹校長の強い思いがあった。同校は17年度、県立高校改革によって普通科スポーツリーダーコースが募集停止となり、「スポーツの山北」という同校の特色の1つが失われた。新たな特色づくりを検討する中、藤田校長は、学校が位置する県西部で県が推進する県西地域活性化プロジェクトの「未病」と、地域の課題である「防災」に着目した。

病気の予防と早期発見を目指す未病の改善は、スポーツリーダーコースが取り組んできた運動や健康の学びと親和性が高く、それまで積み重ねてきた知見を生かすことができると考えた。また、町立の学校として開校した同校は、現在に至るまで地域との結びつきが強く、学校は防災拠点の役割を担い、生徒は地域の高齢者施設や幼稚園を訪れ、防災訓練や救急法の実習などを実施していた。

「学校外での活動は、生徒が親や教師以外の大人と触れ合う貴重な機会です。実践の場があることで、生徒の学びの意欲は向上し、成長にもつながります。そこで、2つの地域課題と『総合探究』を結びつけた地域連携を通じて町づくりに貢献することで、本校ならではの特色づくりを図ることにしました」（藤田校長）

その構想の実現に向けて、藤田校長は、文部科学省からの研究指定を弾みにしようと考えた。さらに、県教委からは、SDGsをテーマにした「総合探究」の先行実施の提案があった。未病も防災もSDGsと関係が深く、SDGsの視点で探究学習に取り組む意義は十分にあった。そこで、2つの研究指定を目指すことになった。

推進体制の整備、指導計画の立案

ワーキンググループが短期間で活動の大枠を立案

文部科学省への申請を目指すことを決めたのが18年夏、秋には県から研究指定の通知があったため、新年度の「総合探究」実施に向けた準備期間は約半年だった。早速、10月に指導計画を検討するワーキンググループ（以下、WG）を設置。メンバーは、学年・教科・分掌の各代表者、そして、移行措置に則り、19年度は1年次から「総合探究」を始めることとし、「総合探究」担当予定の教師を加え、月1回、打ち合わせを行った。

初回のWGでは、「総合探究」で取り上げるテーマを「SDGs」「山北」「未病」「防災」に決定。WGを

＊ Sustainable Development Goals の略。2015 年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17 の目標と 169 のターゲットから成る。

校長
藤田正樹
ふじた・まさき
教職歴34年。同校に赴任して4年目。

連携推進グループリーダー
野秋貴浩
のあき・たかひろ
教職歴13年。同校に赴任して5年目。総括教諭。保健体育科。

2学年担任
小川牧子
おがわ・まきこ
教職歴2年。同校に赴任して3年目。英語科。

1学年担任
山内未来
やまうち・みく
教職歴2年。同校に赴任して3年目。地理歴史・公民科。

神奈川県立山北高校

◎教育方針は、「着実に努力」「凡事徹底」「自学自習」。2017年度に「山北Dream」を立ち上げ、学習・進路・部活動・生活など、学校生活全般において生徒を支える体制づくりを推進。「スポーツリーダーコース」があったことから、部活動が活発で、「スポーツの山北」としても知られてきた。
◎設立　1942（昭和17）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約200人
◎2020年度進路実績（現役のみ）
4年制大学は、専修大、東海大、日本体育大、神奈川大、関東学院大などに延べ61人が合格。短大、専門学校進学87人、就職39人。
◎URL　https://www.pen-kanagawa.ed.jp/yamakita-h/

さらに4グループに分け、各グループが1テーマずつ担当することとし、それぞれで具体的な活動内容を議論した。

同校の教師の大半に探究学習の指導経験がほとんどなかったため、先進校の視察やファシリテーションに関する研修の受講などをメンバーが手分けをして行い、学んだ内容をWG内で共有した。議論を経て、活動内容の柱を「探究のサイクルを回すこと」と整理し、用いる教材はその観点を重視した「探究ナビ」を採用した。19年度1学年担当の小川牧子先生は、議論の過程をこう振り返る。

「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の4つの過程から成る探究のサイクルを回すことが大切であり、それぞれのつながりを意識しないと、調べ学習や発表しただけにとどまってしまうと学びました。探究のサイクルを回すという基本方針の下、できることから始めることにしました。そうしたことで、活動内容を考えやすくなりました」

計画立案や外部連携を担う「総合探究」の分掌を設置

WGでの検討の結果、同校では、「総合探究」で行う探究学習を「未来探究」と名づけ、3年間の流れを次のように構想した。1学年は、1学期に「SDGs」、2学期に「山北」と「未病」、3学期に「防災」について「知る」探究を進め、グループワークや調査・発表などを通じて、探究学習を一通り実践する。2学年は、個人またはグループで課題を設定して探究する「マイ・プロジェクト」を行い、3学年は、2学年の成果を踏まえて課題に対する具体的な方策を地域で実践する（**図1**）。

「未来探究」が始まる19年4月には、分掌を再編し、年間指導計画の立案や報告書の作成、地域や外部機関との交渉など、「未来探究」の企画・運営を担当する「連携推進グループ」を設置した。1学年主任の野秋貴浩先生がリーダーとなり、教師になって2年目の山内未来（みく）先生ら、若手教師を中心とした6人をメンバーとした。藤田校長は、次のように語る。

「連携推進グループのメンバーには、いざという時には私が責任を取るので、思ったように取り組んでくださいと伝えました。先生方が自由に活動できる環境を整えれば、それぞれの力を発揮することができ、教育の質はおのずと向上します」

図1　「未来探究」の3年間の構想（案）

	1学期	2学期	3学期
1学年 知識の習得	•SDGsについて知る	• 山北について知る • 山北でフィールドワーク（竹林・山林体験活動、歴史散策、商店街散策など） • 未病について知る	• 防災について知る • 山北の課題のまとめ・発表
2学年 探究活動	• 自分の課題設定（未病・防災から選択） • 探究計画を立てる • 情報収集	• 仮説を立てる • フィールドワーク	• 学年合同校内発表
3学年 地域に還元	• それぞれの探究課題に対する具体的な方策を地域で実践 • 校内発表（地域に還元した結果）		• 町に対して政策提言

＊学校資料を基に編集部で作成。

探究学習の工夫

学年団全員が単元計画立案にかかわることで指導を共有

WGが立案した3年間の指導計画に基づいて、連携推進グループは学期ごとの活動計画を具体化する一方、授業計画は、実際に授業を行う学年団の教師が持ち回りで立てた。

19年度は、1学年団の担当者が活動内容と授業展開を考え、ワークシートなどの教材も作成。連携推進グループと学年団は、週1回の頻度でミーティングを行い、授業計画を共有し、必要に応じて、連携推進グループが外部機関と連絡を取った。

1学期に行った「SDGsについて知る」では、小川先生が「フードロス」をテーマに授業計画を作成した。

「授業計画の作成は大変でしたが、骨子があったので考えやすかったです。特定の担当者や分掌だけが授業計画の立案を担うのではなく、学年団全員がかかわることで、当事者意識が生まれました」（小川先生）

2学期に行った「山北について知る」では、地域のNPOと連携し、山北町の竹林・山林・歴史・商店街をテーマにフィールドワークを実施した。NPOとの打ち合わせは連携推進グループが行い、フィールドワークのしおりの作成も担当した。

「教科の授業もある中で、学年団が『未来探究』の活動内容をすべて考え、外部との打ち合わせを行うのは困難です。外部と学校をつなぐ分掌が機動的に動くことが、地域連携の成否を左右すると考えています」（野秋先生）

振り返りを徹底し、培った力は何かを言語化

2学期に行った「未病について知る」では、県の知事部局の紹介で、未病の施策で県と提携を結ぶ企業の協力を得た。そこでも、連携推進グループが企業と打ち合わせを行って活動内容を決定。授業は、ファシリテーションに実績のある外部団体の協力を得て進められ、1学年団はサポート役に回った。企業との協働は、学年団の負担軽減につながっただけでなく、教師が固定観念を破るきっかけになったと、小川先生は語る。

「『未病について知る』では、ファシリテーターが、『表現方法は、動画でもスライドでも何でもいいよ』と声をかけると、生徒は楽しそうに活動していました（**写真**）。私は、探究学習の発表方法は、模造紙かポスターを考えていたので驚きました。探究学習での教師の役割は、生徒が自由に発想できる場を整え、背中を押してあげることだと学びました」

2学期に行った「山北について知る」では、小川先生が中心となりルーブリックを作成した（**P.22「探究学習スタートガイド」図5参照**）。探究学習を通して身につけてほしい資質・能力を生徒に明確に示し、到達目標を持たせるためだ。以降、授業計画立案時にルーブリックを作成し、授業開始時に生徒に配布して、授業前後に自己評価を行うという展開が定着した。そうして蓄積した授業ごとの振り返りを毎学期末にまとめ直し、探究学習を通じてどのような力が身についたのかを言語化する機会を設けている。

写真　発表会の様子

2019年12月に行った学習成果の発表会。町や企業の協力者が見守る中、生徒は動画やポスターなど、様々な表現方法で、それまでの学習の成果を発表した。

「未来探究」で学んだことを地域の振興につなげてほしい

20年度は、2学年で「マイ・プロジェクト」を始めた。2学年団に持ち上がった小川先生は、連携推進グループにも所属。同グループで検討した学期ごとの活動計画も、生徒の状況を踏まえて修正することにした。

例えば、7月に行った「マイ・プロジェクト」では、山北町の産業や特産品等に関する調べ学習を、小川先生が提案した。すると、ほかの教師から近隣地域も対象にしてはどうかという提案があった。現在、町内に住む生徒の割合は5％程度で、90％以上が小田原市や南足柄市などの県西地域から通学している。そこで、自分が住む地域をテーマにした方が、生徒の関心・意欲も高まると考えた。その提案を踏まえ、実施直前ではあったが、近隣地域も対象に加え、調べる地域を選べるようにした。

「『未来探究』で取り上げる課題は、県西地域全体が直面しているものです。本校で学んだ生徒が将来、地域の課題に向き合う時、『未来探究』で学んだことが生かせることを願っています。そうした思いを実現するために、柔軟な対応ができる教師を頼もしく思っています」（藤田校長）

成果と展望

直接話すだけではない、対話的な方法を模索

「未来探究」実施後、生徒の学習に向かう態度の変化に、教師は手応

えを感じている。学期が進むごとに、グループワークに前向きに取り組む生徒は増え、生徒へのアンケートで、「一番頑張ったと思うこと」に「勉強」と回答した割合は、「中学の時」9％に対し、「高校入学後」は23％に増加していた。また、大半の教師に探究学習の指導経験がない中でのスタートだったが、担当分掌と学年団の連携によって探究学習を円滑に推進することができた。

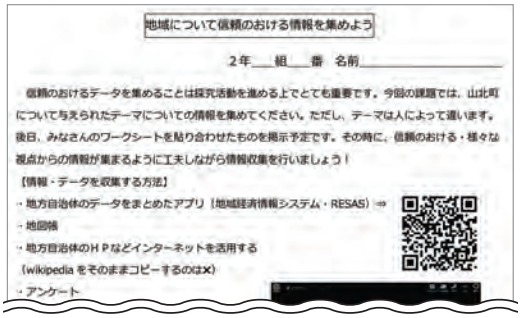
新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、教育活動に制限がある中でも探究学習を実施する同校では、今後に向けて、より効率的な実践を模索している。1学年では、「未来探究」の導入として、SDGsの17の目標について調べ学習を行う際に、自身の進路との関係を意識させることとした。1学年担任の山内先生は、そのねらいを次のように語る。

「私は19年度に3学年副担任を務めましたが、3年生になっても将来自分は何をしたいのかが明確になっていない生徒がいることに課題を感じていました。そこで、1学年の担任となった今年度、『未来探究』の最初の活動にキャリア教育の視点を取り入れました。臨時休業中に、世界の課題と自分の関心が重なる分野について調べさせることで、自分事として探究学習に取り組めるようにしたいと考えました」

2学年では、臨時休業中に個人課題を出した。それは、外部のコンテストで入賞した他校生のプレゼンテーションの動画を視聴した後、1年次に行った自分の発表と比較して、違う点や参考にすべき点などを考えるといった内容だ。加えて、「マイ・プロジェクト」に向けた活動として、地域についての「信頼のおけるデータ」を調べる課題も出した（**図2**）。課題に取り組んだ成果はポスターにまとめておき、学校が再開した6月に、ポスターを廊下に掲示する形で全体に共有した。

「臨時休業下では、個人学習を進めることにしました。グループワークのねらいは、生徒同士がコミュニケーションを取ることではなく、各人が視野を広げ、考えを深めることにあります。今回は、個人で課題に取り組んだ成果をまとめたポスターを見合うことで、そのねらいを実現しようと考えました。また、臨時休業中にオンラインで回答させたものや、紙に記載させたものは、学校再開時に生徒同士で共有しましたが、教師のICTスキルを向上させて、生徒がタイムラグなく、互いの考えを共有し合える場を設けたいと考えています」（小川先生）

図2　臨時休業中の2年生の探究学習



臨時休業中、2年生の探究学習では、提示されたテーマについてウェブサイトなどで調べるという課題を出した。

私の探究学習

自分で決めた活動を進めた経験が責任感を強くさせた

2年生　杉本 桜

1学年の「未来探究」では、様々なことを調べました。最初は、何を、どうやって調べればよいのか、全く分かりませんでしたが、先生からアドバイスをいただきながら、調べるテーマも調査方法も自分で決めて、活動を進めました。例えば、「山北について知る」では、私は町の主力産業である林業をテーマにして調べました。振り返ってみると、そうやって自分は何がしたいのかを考えて活動することを繰り返したおかげで、物事に対する責任感を強く持てるようになったと思います。また、調べ学習の回数を重ねるうちに、インターネットの情報がすべて正しいと思い込まずに、複数の情報を調べて確認するなど、情報リテラシーも高まりました。

グループの役割分担を意識して、積極的に意見を出すように

2年生　鈴木真菜

私は、地元・小田原の特産品である梅を探究テーマにしました。中学校の調べ学習でも取り上げましたが、まだ知らないことがあると思い、もう一度調べることにしました。誰かに指示されたわけではなく、自分で選んだテーマなので、意欲が湧き、調べる内容や調べ方も自分で考えて、探究学習に楽しく取り組んでいます。今は、小田原の梅の知名度を上げる方法を考えています。

グループワークを何度もするうちに、司会をする人、意見をまとめる人など、メンバー間で自然と役割分担ができるようになりました。メンバーのみんなが意見を出しやすくすることも考えて、私は積極的に意見を出すことを意識しています。